

## 薩摩系大名、 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトに会う 島津重豪が意図したもの

奥 正敬

### はじめに

江戸時代後期の文政九(1826)年、薩摩藩の前藩主で蘭学通として知られていた島津重豪(1745-1833)が子供や曾孫を伴って、オランダ東インド会社の医師で広い知識の持ち主であるドイツ人フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold, 1796-1866)とはじめて会見しました。シーボルトは文政六(1823)年に来日して長崎に鳴滝塾を開き、蘭学を志す多くの日本人を指導しており、その名声は全国に知れわたっていました。この会見の様子をシーボルトが、自らの著書 *Nippon* (『日本』)に書き留めており、重豪が意図していたことを推測することができます。

### 島津重豪という人物

重豪は徳川幕府の開闢後、百五十年を経た宝暦五(1755)年に、分家筋の当主から僅か十一歳で薩摩藩主の座に就きました。時の名を忠洪といい、三年後に元服して重豪を名乗りました。この頃までの薩摩藩は戦国時代からの武勇こそ轟いていましたが、藩政は後進的な部分が強く、重豪は二十五代当主としてこの近代化を推し進めます。若き頃の重豪は儒学や東洋系の学問に傾注して歴史書や中国語辞書を編纂し、藩校や医学院、薬園などの設置に力を注いでいます。また、明和八(1771)年には、江戸からの帰路に長崎出島のオランダ商館に立ち寄り、オランダ船の見学を行っています。さらに、その後イサーク・ティッチングやヘンドリック・ドーフなどの歴代の商館長とも親交を深めて、オランダから流入する学問に関心を持つようになりました。天明七(1787)年に長男の斉宣を襲封させて隠居の身となり、東洋系の学問と共に蘭学に対する関心をさらに高めたようです。これは、享保五(1720)年の徳川幕府による禁書令の緩和以来、顕著になっていた蘭学の実用性を重豪が認識していたことによるものと思われる。この後、松平定信が主導した寛政の改革で、異

学の禁として朱子学以外の儒学は遠ざけられたものの、ロシア勢力の南下に対応するための蘭学研究までを完全に否定することは出来ず、やがてその必要性は以前にも増して強いものとなります。早くから東洋医学を基に医学院や薬草園まで作っていた重豪が、幕政の推移を見計らって蘭学の実用部分を可能な限り領国の産業振興に取り入れようと考えていたとしても不思議ではありません。

このような重豪は子沢山としても知られ、生涯に二十三人の子供に恵まれています。三女の茂子は後に徳川十一代将軍となった一橋家の徳川家斉に嫁ぎ、重豪はやがて将軍の岳父となります。前述の四子で長男の斉宣は島津家を継ぎましたが、三人の男子が他の大名家に養子に入り、また娘たちを各地の有力大名家へ嫁がせるなどして、シーボルトと会見する時期には隠然たる地位を確立していたのです。

### シーボルトを大森に出迎える

さて、話は文政九(1826)年に戻ります。重豪は二男で養子として豊前中津藩主の座にあった奥平昌高と曾孫の島津斉彬を従えてシーボルトと会見するため、オランダ商館長ヨアン・ウィルレム・ド・ステュルレルの江戸参府一行を大森で出迎えました。このとき重豪は八十二歳になっていましたが、シーボルトが見る限り六十五歳位に感じられたようです。重豪は時々オランダ語を交えて話し、鳥や動物を剥製にする方法を質問しています。また、昌高はオランダ語でシーボルトと流暢に挨拶を交わしたことが『日本』に記されています。さらに、その後も通詞を交えて重豪たちからの質問や意見の交換がなされました。この後、シーボルトの江戸滞在中に重豪は昌高と共に公式に一回、昌高は非公式に五回にわたって宿泊所を訪ねています。その間、重豪はシーボルトの門人になることを願い、シーボルトは鳥の剥製法を教え、重豪や側室の診察をするなど、彼の蘭学への思いを満たしています。

このように、商館長の江戸滞在中の短い間でしたが、重豪とシーボルトはお互いに尊敬の念を払いながら付き合い合いました。オランダ側から見れば、重豪と昌高は身分と学識からしてシーボルトが言う最大の「庇護者」であったのです。